

水害雜録

伊藤左千夫

青空文庫

臆病者というのは、勇氣の無い奴やつに限るものと思つておつたのは誤りであつた。人間は無事をこいねがうの念の強ければ、その強だけそれだけ臆病になるものである。人間は誰とて無事をこいねがうの念の無いものは無い筈であるが、身に多くの係累者を持った者、殊に手足まといの幼少者などある身には、更に痛切に無事を願うの念が強いのである。

一朝禍わざわいを蹈むの場合にあたつて、係累の多い者ほど、惨害はその惨の甚しいものがあるからであらう。

天災地變の禍害というも、これが単に財産居住を失うに止まるか、もしくはその身一身を処決して済むものであるならば、その悲惨は必ずしも惨の極きよくなるものではない。一身係累を顧みるの念が少ないならば、早く禍の免れ難きを覚悟したとき、自ら振作みづかしんさするの勇氣は、もつて笑いつつ天災地變に臨むことができると思うものの、絶つに絶たれない係累が多くて見ると、どう考えても事に対する処決は單純を許さない。思慮分別の意識からそうなるのではなく、自然的な極めて力強い余儀ないような感情に壓せられて勇氣の振いおこ

る余地が無いのである。

宵から降り出した大雨は、夜一夜を降り通した。豪雨だ……そのすさまじき豪雨の音、そうしてあらゆる方面に落ち激つ水の音、ひたすら事なかれと祈る人の心を、有る限りの音声をもつて脅すかのごとく、豪雨は夜を徹して鳴り通した。

少しも眠れなかったごとく思われたけれど、一睡の夢の間にも、豪雨の音声におびえていたのだから、もとより夢か現かの差別は判らないのである。外は明るくなって夜は明けて来たけれど、雨は夜の明けたに何の関係も無いごとく降り続けている。夜を降り通した雨は、又昼を降り通すべき氣勢である。

さんざん耳から脅された人は、夜が明けてからは更に目からも脅される。庭一面に漲り込んだ水上に水煙を立てて、雨は篠を突いているのである。庭の飛石は一箇も見えてるのが無いくらいの水だ。いま五、六寸で床に達する高さである。

もう畳を上げた方がよいでしょう、と妻や大きい子供らは騒ぐ。牛舎へも水が入りましたと若い衆も訴えて来た。

最も臆病に、最も内心に恐れておった自分も、側から騒がれると、妙に反撥心が起る。殊更に落ちついてる風をして、何ほど増して来たところで溜り水だから高が知れてる。そ

んなにあわてて騒ぐに及ばないと一喝^{いつかつ}した。そうしてその一喝した自分の声にさえ、実際は恐怖心が揺いだのであった。雨はますます降る。一時間に四分五分ぐらいずつ水は高まって来る。

強烈な平和の希望者は、それでも、今にも雨が静かになればと思う心から、雨声の高低に注意を払うことを、秒時もゆるがせにしてはいない。

不安——恐怖——その堪えがたい懊惱^{おうのう}の苦しみを、この際幾分か紛^{まぎ}らかそうには、体を運動する外はない。自分は横川天神川の増水^{いかん}如何を見て来ようとわれ知らず身を起した。出掛けしなに妻や子供たちにも、いざという時の準備を命じた。それも準備の必要を考えたよりは、彼らに手仕事を授けて、いたずらに懊惱することを軽めようと思つた方が多かつた。

干潮の刻限である為か、河の水はまだ意外に低かつた。水口^{みずぐち}からは水が随分盛んに落ちてゐる。ここで雨さえやむなら、心配は無いがなアと、思わず嘆息せざるを得なかつた。水の溜^{たま}つてゐる面積は五、六町内に跨^{また}がつてゐるほど広いのに、排水の落口というのは僅かに三か所、それが又、皆落口が小さくて、溝は七まがりと迂曲^{うきよく}している。水の落ちるのは、干潮の間僅かの時間であるから、雨の強い時には、降つた水の半分も落ちきらぬ内に、

上げ潮の刻限になつてしまふ。上げ潮で河水が多少水口から突上るところへ更に雨が強ければ、立ちしか間にこの一区劃内に湛えてしまふ。自分は水の心配をするたびに、この工事をやった人の、馬鹿馬鹿しきまで実務に不忠実な事を呆れるのである。

大洪水は別として、排水の装置が實際に適しておるならば、一日や二日の雨の為に、この町中へ水を湛うるような事は無いのである。人事僅かに至らぬところあるが為に、幾百千の人が、一通りならぬ苦しみをすることを思うと、かくのごとき実務的の仕事に、ただ形ばかりの仕事をして、平氣な人の不親切を嘆息せぬ訳にゆかないのである。

自分は三か所の水口を検して家に歸つた。水は三か所へ落ちているにかかわらず、わが庭の水層は少し増しておつた。河の水はどうですかと、家の者から口々に問わるにつけても、ここで雨さえ小降りになるなら心配は無いのだがなアと、思わず又嘆息を繰返すのであつた。

一時間に五分ぐらいずつ増してるから、これで見ると床へつくにはまだ十時間ある訳だ。いつでも畳を上げられる用意さえして置けば、住居の方は差当り心配はないとしても、もう捨てて置けないのは牛舎だ。尿板の後方へは水がついてるから、牛は一頭も残らず起つてゐる。そうしてその後足には皆一寸ばかりずつ水がついてる。豪雨は牛舎の屋根に鳴

いおん
音烈しく、ちよつとした会話が聞取れない。いよいよ平和の希望は絶えそうになった。

人が、自殺した人の苦痛を想像して見るにしても、たいていは自殺そのものの悲劇をのみ強く感ずるのであろう。しかし自殺者その人の身になったならば、われとわれを殺すその実劇よりは、自殺を覚悟するに至る以前の懊悩が、遥かに自殺そのものよりも苦しいのでなからうか。自殺の凶器が、目前^{もくぜん}に横たわった時は、もはや身を殺す恐怖のふるえも静まつているのでなからうか。

豪雨の声は、自分に自殺を強いてる声であるのだ。自分はなお自殺の覚悟をきめ得ないので、もがきにもがいているのである。

死ぬときまつた病人でも、死ぬまでになお幾日かの間があるとすれば、その間に処する道を考えねばならぬ。いわんや一縷^{いちる}の望みを掛けているものならば、なおさらその覚悟の中に用意が無ければならぬ。

何ほど恐怖絶望の念に懊悩しても、最後の覚悟は必ず相当の時機を待たねばならぬ。

豪雨は今日一日を降りとおして更に今夜も降りとおすものか、あるいはこの日暮頃にでも歇^やむものか、もしくは今にも歇^やむものか、一切^{いっさい}判らないが、その降り止む時刻によって恐水者の運命は決するのである。いずれにしても明日の事は判らない。判らぬ事には覚

悟のしようもなく策の立てようも無い。厭でも中^{ちゆう}有^うにつられて不安状態におらねばならぬ。

しかしながら牛の後足に水がついてる眼前の事實は、もはや何を考へて余地を与えない。自分はそれに促されて、明日の事は明日になつてからとして、ともかくも今夜一夜を凌^{しの}ぐ画策を定めた。

自分は猛雨を冒して材木屋に走つた。同業者の幾人が同じ目的をもつて多くの材料を求め走つたと聞いて、自分は更に恐怖心を高めた。

五寸角^{かく}の土台数十丁一寸^{あつ}厚みの松^{まつ}板^{いた}数十枚は時を移さず、牛舎に運ばれた。もちろん大工を呼ぶ暇は無い。三人の男共を指揮して、数時間豪雨の音も忘れるまで活動した結果、牛舎には床^{ゆかうえ}上更に五寸の仮^{かり}床^{ゆか}を造り得た。かくて二十頭の牛は水上五寸の架^{かし}床^{しょう}上に争^あうて安臥^{あんが}するのであつた。燃^{ねん}材^{ざい}の始末、飼料品の片づけ、為すべき仕事は無際限にあつた。

人間に対する用意は、まず畳を上げて、襖障子^{ふすまようじ}諸財^{しよざい}一切^{いっさい}の始末を、先^{せん}年^{ねん}大水^{おおみづ}の標準によつて、処理し終つた。並^{なみ}の席より尺余^{しゃくよゆか}床を高くして置いた一室^{いしつ}と離屋^{はなれ}の茶室の一間とに、家族十人の者は二分^{にぶん}して寝に就く事になった。幼ないもの共は茶室へ寝るの

を非常に悦んだ。そうして間もなく無心に眠ってしまった。二人の姉共と彼らの母とは、この気味の悪い雨の夜に別れ別れに寝るのは心細いというて、雨をおか冒し水を渡つて茶室へやつて来た。

それでも、これだけの事で済んでくれればありがたいが、明日はどうなる事か……取片づけに掛けてから幾たびも幾たびもいい合うた事を又も繰返すのであった。あとに残つた子供たちに呼び立てられて、母娘は寂しい影を夜の雨にぼっ没して去つた。

遂にその夜も豪雨は降りとおした。実に二夜と一日、三十六時間の豪雨はいかなる結果を来すきたべきか。翌日は晁々と日が照つた。水は少しずつ増しているけれど、牛の足へもまだ水はつかなかつた。避難の二席にせきにもまだ五、六寸の余裕はあつた。新聞紙は諸方面の水害と今後の警戒すべきを特報したけれど、天気になったという事が、非常にわれらを気強く思わせる。よし河の水が増して来たところで、どうにかしの凌ぎのつかぬ事は無からうなどと考へつつ、懊悩の頭也大いに軽くなつた。

平和に渴かつした頭は、とうてい安んずべからざるところにも、強いて安居あんごせんとするものである。

二

大雨たいうが晴れてから二日目の午後五時頃であつた。世間は恐怖のしきちよう色調をおびた騒さわぎをもつて満たされた。平生へいぜい聞きこゆるところの都会的音響はほとんど耳に入らないで、うかとしていれば聞き取ることのできない、物の底深くに、力強い騒さわぎを聞くような、人を不安に引き入れねばやまないような、深酷な騒さわぎがそこら一帯の空気を振しんとう蕩とうして起つた。

天神川も溢あふれ、豎たて川も溢あふれ、横川も溢あふれ出したのである。平和は根こん柢ていから破れて、戦闘は開始したのだ。もはや恐怖も遅疑も無い。進むべきところに進ほむ外ほか、何かを顧かえりみる余地も無くなつた。家族には近い知人の二階屋に避難すべきを命じ置き、自分は若い者三人を叱しつして乳牛の避難にかかった。かねてこと見定みさだめて置いた高架鉄道の線路に添こうた高こ地うちに向つて牛を引き出す手筈である。水深はなお腰に達しないくらいであるから、あえて困難というほどではない。

自分はまず黒白斑くろしろぶちの牛と赤牛との二頭を牽出ひきだす。彼ら無心の毛族けものも何らか感ずるところあると見え、残る牛も出る牛もいつせいに声を限りと叫び出した。その騒々さわしさは又自おのずから牽手ひきての心を興奮させる。自分は二頭の牝牛めうしを引いて門を出た。腹部まで水に浸ひたされて

引出された乳牛は、どうされると思うのか、右往左往と狂い廻る。もとより溝も道路も判らぬのである。たちまち一頭は溝に落ちてますます狂い出す。一頭はひた走りに先に進む。自分は二頭の手綱たづなを採つて、ほとんど制馭せいぎよの道を失った。そうして自分も乳牛に引かる勢いに駆られて溝へはまった。水を全身に浴みてしまった。若い者共も二頭三頭と次々引出して来る。

人畜じんちくを挙げて避難する場合に臨んでも、なお濡るるを恐れておった卑怯者も、一度溝にはまって全身水に漬つかつては戦士が傷きずついて血を見たにも等しいものか、ここに始めて精神の興奮絶頂に達し猛然たる勇氣は四肢ししの節々ふしぶしに振動した。二頭の乳牛を両腕もとの下に引据え、奔流を蹴破つて目的地に進んだ。かくのごとく二回三回数時間の後全く乳牛の避難を終え、翌日一日分の飼料をも用意し得た。

水層はいよいよ高く、四ツ目よめより太平町たいへいちように至る十五間幅の道路は、深さ五尺に近く、濁流奔放舟をもつて渡るも困難を感じるくらいである。高架線の上に立つて、逃げ捨てたわが家を見れば、水上に屋根ばかりを見得るのであった。

水を恐れて雨に懊悩した時は、未だ直接に水に触れなかったのだ。それで水が恐ろしかったのだ。濁水を冒して乳牛を引出し、身もその濁水に没入してはもはや水との争闘であ

る。奮闘は目的を遂げて、牛は思うままに避難し得た。第一戦に勝利を得た心地である。

洪水の襲撃を受けて、失うところの大なるを^{だい}恨^{ちようこん}恨するよりは、一方のかこみを打破

った奮闘の勇氣に快味を覚ゆる時期である。化膿せる腫物^{しゅもつ}を切^{せつ}開^{かい}した後の痛快は、や

や自分の今に近い。打撃はもとより深酷であるが、きびきびと問題を解決して、総ての懊

悩を一掃した快味である。わが家の水上僅かに屋根ばかり現われおる状^{さま}を見て、いささか

も痛恨の念の湧かないのは、その快味がしばらくわれを支配しているからであるまいか。

日は暮れんとして空は又雨模様である。四方^{あたり}に聞ゆる水の音は、今の自分にはもはや壮

快に聞えて来た。自分は四方を眺めながら、何とはなしに天神川の鉄橋を渡ったのである。

うず高に水を盛り上げてゐる天神川は、盛んに濁水を兩岸に奔^{ほん}溢^{いつ}さしている。薄暗く曇

った夕暮の底に、濁水の溢れ落つる白泡が、夢かのようにぼんやり見渡される。恐ろしい

ような、面白いような、いうにいわれない一種の強い刺戟に打たれた。

遠く亀戸方面を見渡して見ると、黒い水が漫々として大湖のごとくである。四方^{あたり}に浮い

てる家棟^{やのむね}は多くは軒以上を水に没している。なるほど洪水じやなと嗟嘆^{さたん}せざるを得なな

った。

亀戸には同業者が多い。まだ避難し得ない牛も多いと見え、そちこちに牛の叫び声がし

ている。暗い水の上を伝わって、長く尻声を引く。聞く耳のせいかな溜らなく厭な声だ。稀に散在して見える三つ四つの燈火がほとんど水にひつついて、水平線の上に浮いてるかのごとく、寂しい光を漏らしている。

何か人声が遠くに聞えるよと耳を立てて聞くと、助け舟は無いかア……助け舟は無いかア……と叫ぶのである。それも三回ばかりで声は止んだ。水量が盛んで人間の騒ぎも壓せられてるものか、割合に世間は静かだ。まだ宵の口と思うのに、水の音と牛の鳴く声の外には、あまり人の騒ぎも聞えない。寥々りようりようとして寒そうな水が漲っている。助け舟を呼んだ人は助けられたかいなかも判らぬ。鉄橋を引返してくると、牛の声は幽かすかになった。壮快な水の音がほとんど夜を支配して鳴ってる。自分は眼前の問題にとらわれてわれ知らず時間を費やした。来て見れば乳牛の近くに若者たちもいず、わが乳牛は多くは安臥して食はみ返しをやっておった。

何事をするも明日の事、今夜はこれだと思ひながら、主なき家の有様も一見したく、自分は再び猛然水に投じた。道路よりも少しく低いわが家の門内に入ると足が地につかない。自分は泳ぐ気味にして台所の軒へ進み寄った。

幸さいわいに家族の者が逃げる時に消し忘れたものらしく、ランプが点ともして釣り下げてあつた。

天井高く釣下げたランプの尻にほとんど水がついておった。床の上に昇って水は乳まであった。醤油樽、炭俵、下駄箱、上げ板、薪、雑多な木屑等有ると有るものが浮いている。どろりとした汚い悪水が、身動きもせず、ひしひしと家一ぱいに這入っている。自分はお一渡り奥の方まで一見しようと、ランプに手を掛けたら、どうかした拍子に火は消えてしまった。後は闇々黒々、身を動かせば雑多な浮流物が体に触れるばかりである。それでも自分は手探り足探りに奥まで進み入った。浮いてる物は胸にあたる、顔にさわる。畳が浮いてる、箆筥が浮いてる、夜具類も浮いてる。それぞれの用意も想像以外の水でことごとく無駄に帰したのである。

自分はこの全滅的荒廃の跡を見て何ら悔恨の念も無く不思議と平然たるものであった。自分の家という感じがなく自分の物という感じも無い。むしろ自然の暴力が、いかにもきびきびと残酷に、物を破り人を苦しめた事を痛快に感じた。やがて自分は路傍の人と別れるように、その荒廃の跡を見捨てて去った。水を恐れて連夜眠れなかった自分と、今の平気な自分と、何の為にしかるかを考えもしなかった。

家族の逃げて行つた二階は七畳ばかりの一室であつた。その家の人々の外に他よりも四、五人逃げて来ておつた。七畳の室に二十余人、その間に幼いもの三人ばかりを寝せてしま

えば、他の人々はただ膝と膝を突合せて坐しおるのである。

罪に触れた者が捕縛を恐れて逃げ隠れしてる内は、一刻も精神の休まる時が無く、夜も安くは眠られないが、いよいよ捕えられて獄中の人となつてしまえば、気も安く心も暢びて、愉快に熟睡されると聞くが、自分の今夜の状態はそれに等しいのであるが、将来の事はまだ考える余裕も無い、煩悶苦悩決せんとして決し得なかった問題が解決してしまった自分は、この数日来に無い、心安い熟睡を遂げた。頭を曲げ手足を締め海老のごとき状態に困臥しながら、なお気安く心地爽かに眠り得た。数日来の苦悩は跡形も無く消え去った。ために体内新たな活動力を得たごとくに思われたのである。

実際の状況はと見れば、僅かに人畜の生命を保ち得たのに過ぎないのであるが、敵の襲撃があくまで深酷を極めているから、自分の反抗心も極度に興奮せぬ訳にゆかないのである。どこまでも奮闘せねばならぬ決心が自然的に強固となつて、大災害を哀嘆してる暇がない為であろう。人間も無事だ、牛も無事だ、よしといったような、爽快な気分ですらで熟睡した。

家の雞が鳴く、家の雞が鳴く、という子供の声が入って眼を覺した。起つて窓外を見れば、濁水を一ぱいに湛えた、わが家の周囲の一廓に、ほのぼのと夜は明けておつた。

忘れられて取残された雞は、主なき水漬屋に、常に変らぬのどかな声を長く引いて時を告ぐるのであった。

三

一時の急を免れた避難は、人も家畜も一夜の宿りがようやくの事であった。自分は知人某^{なにがし}氏を両国に訪^とうて第二の避難を謀^{はか}った。俠氣と同情に富める某^{なにがし}氏は全力を尽して奔走してくれた。家族はことごとく自分の二階へ引取ってくれ、牛は回向院^{えこういん}の庭に置くことを諾された。天候情^{じょう}なくこの日また雨となった。舟で高架鉄道の土堤へ漕ぎつけ、高架線の橋上を両国に出ようというのである。われに等しき避難者は、男女老幼、雨具も無きが多く、陸續として、約二十町の間を引ききりなしに渡り行くのである。十八を頭^{かしら}に赤子の守子^{もりこ}を合して九人の子供を引連れた一族もその内の一群であった。大人はもちろん大きい子供らはそれぞれ持物^{もちもの}がある。五ツになると七ツになる幼きものどもが、わがままもいわず、泣きもせず、おぼつかない素足^{すあし}を運びつつ泣くような雨の中をとにかくも長い長い高架の橋を渡ったあわれさ、両親の目には忘れる事のできない印象を残した。

もう家族に心配はいらない。これから牛という事でその手配にかかった。人数が少くて数回にひくことは容易でない。二十頭の乳牛を二回に牽くとすれば、十人の人を要するのである。雨の降るのにしかも大水の中を牽くのであるから、無造作には人を得られない。
 某^{なにがし}氏の尽力によりようやく午後の三時頃に至つて人を頼み得た。

なるべく水の浅い道筋を選ばねばならぬ。それで自分は、天神川の附近から高架線の上を本所^{ほんじよ}停車場に出て、横川に添うて豎^{たて}川^{かわ}の河岸^{かし}通を西へ両国に至るべく順序を定めて^{さだ}出発した。雨も止んで来た。この間の日の暮れない内に牽いてしまわねばならない。人々は勢い込んで乳牛の所在地へ集つた。

用意はできた。この上は鉄道員の許諾^{きよだく}を得、少しの間線路を通行させて貰わねばならぬ。自分は駅員の集合してゐる所に到つて、かねて避難してゐる乳牛を引上げるについてこより本所停車場までの線路の通行を許してくれと乞うた。駅員らは何か話合つていたらしく、自分の切願^{いっこん}に一顧^{いっこん}をくれるものも無く、挨拶もせぬ。

いかがでしょうか、物の十分間もかかるまいと思ひますから、是非お許しを願ひたいですが、それにこのすぐ下は水が深くてとうてい牛を牽く事ができませんから、と自分は詞^{ことば}を尽^{つく}して哀願した。

そんな事は出来ない。いったいあんな所へ牛を置いちやいかんじやないか。

それですからこれから牽くのですが。

それですからつて、あんな所へ牛を置いて届けても来ないのは不都合じやないか。

無情冷酷……しかも横柄おうへいな駅員の態度である。精神興奮してゐる自分は、癩しやくさわに障つて堪たまらなくなつた。

君たちいったいどこの国の役人か、この洪水が目に入らないのか。多くの同胞が大水害に泣いてゐるのを何と見てるか。

ほとんど口の先まで出たけれど、僅かにこらえて更に哀願した。結局避難者を乗せる為に列車が来るから、帰つてからでなくてはいけないということであつた。それならそうと早くいつてくれればよいのだ。そうして何時頃来るかといえ、それは判らぬという。そのじつ判つてゐるのである。配下の一員は親切に一時間と経ない内に来るからと注意してくれた。

かれこれ空しく時間を送つた為に、日の暮れない内に二回牽くつもりであつたのが、一回牽き出さない内に暮れかかつてしまつた。

なれない人たちには、荒れないような牛を見計みはからつて引かせることにして、自分は先せんと

頭に大きい赤白斑の牝牛を引出した。十人の人が引続いて後から来るといふような事にはゆかない。自分は続く人の無いにかかわらず、まっすぐに停車場へ降りる。全く日は暮れて僅かに水面の白いのが見えるばかりである。鉄橋の下は意外に深く、ほとんど胸につく深さで、奔流しぶきを飛ばし、少しの間流れに遡つて進めば、牛はあわて狂うて先に出ようとす。自分は胸きりの水中容易に進めないから、しぶきを全身に浴びつつ水に咽せて顔を正面に向けて進むことはできない。ようやく埒外に出れば、それからは流れに従つて行くのであるが、先の日に石や土俵を積んで防禦した、その石や土俵が道中に散乱してあるから、水中に牛も躓く人も躓く。

わが財産が牛であつても、この困難は容易なものではないに思ふと、臨時に頼まれてしかも馴れない人たちの事が気にかかるのである。自分はしばらく牛を控えて後から来る人たちの様子を窺うた。それでも同情を持つて来てくれた人たちであるから、案じたほどでなく、続いて来る様子に自分も安心して先頭を務めた。半数十頭を回向院の庭へ揃えた時はあたかも九時であつた。負傷した人もできた。一回に恐れて逃げた人もできた。今一回は実に難事となつた。某氏の激励至らざるなく、それでようやく欠員の補充もできた。二回目には自分は最後に廻つた。ことごとく人々を先に出しやつて一渡り後を見廻すと、八

升入の牛乳罐が二つバケツが三箇^{みつ}残つてある。これは明日に入用の品である。若い者の取落したのか、下の帯一筋あつたを幸に、それにて牛乳罐を背^せ負い、三箇のバケツを左手にかかえ右手に牛の鼻^{はなづな}綱を取つて殿^{しんがり}した。自分より一歩先に行く男は始めて牛を牽くという男であつたから、幾度か牛を手離してしまふ。そのたびに自分は、その牛を捕えやりつつ擁護の任を兼ね、土を洗い去られて、石川といった、^{たて}豎川の河岸を練り歩いて来た。もうこれで終了すると思えば心にも余裕ができる。

道々考へるともなく、自分の今日の奮闘はわれながら意外であつたと思うにつけ、深夜十二時あえて見る人もないが、わがこの容態はどうだ。腐つた下の帯に乳罐二箇を負ひ三箇のバケツを片手に捧げ片手に牛を牽いている。臍^{へそ}も脛^{はざ}も出ずるがままに隠しもせず、奮闘といえば名は美しいけれど、この醜態は何のざまぞ。

自分は何の為にこんな事をするのか、こんな事までせねば生きていられないのか、果なき人生に露のごとき命を食^{むさぼ}つて、こんな醜態をも厭われない情なき、何という卑しき心であろう。

前の牛もわが引く牛も今は落ちついて静かに歩む。二つ目より西には水も無いのである。手に足に氣くばりが無くなつて、考えは先から先へ進む。

超世的詩人をもつて深く自ら任じ、常に万葉集を講じて、日本民族の思想感情における、正しき伝統を解得し継承し、よつてもつて現時の文明にいささか貢献するところあらんと期する身が、この醜態は情ない。たとい人に見らるるの憂いがないにせよ、余儀なき事の勢いに迫つたにせよ、あまりに蛮性の露出である。こんな事が奮闘であるならば、奮闘の価は卑しいといわねばならぬ。しかし心を卑しくするのと、体を卑しくするのと、いずれが卑しいかといえ、心を卑しくするの最も卑しむべきはいうまでも無いことである。そう思うて見ればわが今夜の醜態は、ただ体を卑しくしたのみで、心を卑しくしたとはいえないのであろうか。しかし、心を卑しくしないにせよ、体を卑しくしたその事の恥ずべきは少しも減ずる訳ではないのだ。

先着の伴牛はしきりに友を呼んで鳴いている。わが引いている牛もそれに応じて一声高く鳴いた。自分は夢から覚めた心地になつて、覚えず手に持った鼻綱を引詰めた。

四

水は一日に一寸か二寸しか減じない。五、六日経つても七寸とは減じていない。水に漬

つた一切の物いまだに手の着けようがない。その後も幾度か雨が降った。乳牛は露天に立つて雨たたきにされている。同業者の消息もようやく判つて来た。亀戸の某は十六頭殺した。太平町の某は十四頭を、大島町の某は犢十頭を殺した。わが一家の事に就いても種々の方面から考えて惨害の感じは深くなるばかりである。

疲労の度が過ぐればかえつて熟睡を得られない。夜中幾度も目を覚す。僅かな睡眠の中にも必ず夢を見る。夢はことごとく雨の音水の騒ぎである。最も懊悩に堪えないのは、實際雨が降つて音の聞ゆる夜である。わが財産の主脳であるところの乳牛が、雨に濡れて露天に立っているのは考えるに堪えない苦しみである。何ともたえようのない情なさである。自分が雨中を奔走するのはあえて苦痛とは思わないが、牛が雨を浴みつつ泥中に立っているのを見ては、言語にいいない切なさを感じるのである。

若い衆は代り代り病氣をする。水中の物もいつまで捨てては置けず、自分の為すべき事は無際限である。自分は日々朝草鞋をはいて立ち、夜まで脱ぐ違がない。避難五日目によやく牛の為に雨掩いができた。

眼前の迫害が無くなって、前途を考うことが多くなった。二十頭が分泌した乳量は半減した上に更に減ぜんとしている。一度減じた量は決して元に恢復せぬのが常である。乳

量が恢復せないで、妊^{にん}孕^{よう}の期を失えば、乳牛も乳牛の価格を保てないのである。損害の程度がやや考量されて来ると、天災に反抗し奮闘したのも極めて意義の少ない行動であつたと嘆ぜざるを得なくなる。

生活の革命……八人の児女^{じじよ}を両肩に負うてる自分の生活の革命を考うる事となつては、胸中まず悲惨の氣に閉塞されてしまう。

残余の財を取纏めて、一家の生命を筆硯に托そうかと考えて見た。^{なんじ}汝は安心してその決行ができるかと問うて見る。自分の心は即時に安心ができぬと答えた。いよいよ余儀ない場合に迫つて、そうするより外に道が無かつたならばどうするかと念を押して見た。自分の前途の惨憺たる有様を想見するより外^{ほか}に何らの答を為し得ない。

一人の若い衆は起きられないという。一人は遊びに出て歸つて来ないという。自分は蹶^け起^{つき}して乳^ち搾^{ちしほ}りに手をかさねばならぬ。天氣がよければ家内らは運び来つた濡れものの仕末に眼の廻るほど忙しい。

家浮沈の問題たる前途の考えも、措^おき難い目前の仕事に逐^おわれてはそのままになる。見舞の手紙見舞の人、一々応答するのも一仕事である。水の家にも一日に数回見廻ることもある。夜は疲労して座に堪えなくなる。朝起きては、身の内の各部に疼痛倦怠を覚え、そ

の業に堪え難き思いがするものの、常よりも快美に進む食事を取りつつひとたび草鞋を踏みしめて起つならば、自分の四肢は凜として振動するのである。

肉体に勇気が満ちてくれば、前途を考える悲観の觀念もいつしか屏息して、愉快に奮闘ができるのは妙である。八人の児女があるという痛切な觀念が、常に肉体を興奮せしめ、その苦痛を忘れしめるのか。

あるいは鎌倉武士以来の関東武士の蛮性が、今なお自分の骨髓に遺伝してしかるものか。破壊後の生活は、総ての事が混乱している。思慮も考察も混乱している。精神の一張一緩ももとより混乱を免れない。

自分は一日大道を闊歩しつつ、突然として思い浮んだ。自分の反抗的奮闘の精力が、これだけ強堅であるならば、一切迷うことはない。三人の若い者を一人減じ自分が二人だけの労働をすれば、何の苦勞も心配もいらぬ事だ。今まで文芸などに遊んでおつた身で、これが果してできるかと自問した。自分の心は無造作にできると明答した。文芸を三、四年間放擲してしまうのは、いささかの狐疑も要せぬ。

肉体を安んじて精神をくるしめるのがよいか。肉体をくるしめて精神を安んずるのがよいか。こう考えて来て自分は愉快でたまらなくなった。われ知らず問題は解決したと独語

した。

五

水が減ずるに従つて、後の始末もついて行く。運び残した財物も少くないから、夜を守る考えも起つた。物置の天井に一坪に足らぬ場所を発見してここに蒲団を展^のべ、自分はそこに横たわつて見た。これならば夜をここに寝られぬ事もないと思つたが、ここへ眠つてしまえば少しも夜の守りにはならないと気づいたから、夜は泊らぬことにしたけれど、水中の働きに疲れた体を横たえて休息するには都合がよかつた。

人は境遇に支配されるものであるということだが、自分は僅かに一^{いっしん}身を入るに足る狭い所へ横臥して、ふと夢のような事を考えた。

その昔相許した二人が、一夜殊に情の高ぶるのを覚えてほとんど眠られなかつた時、彼は嘆じていう。こういう風に互に心持よく円満に楽しいという事は、今後ひとたびいつでもできないかも知れない、いつそ二人が今夜眠つたまま死んでしまつたら、これに上越す幸福はないであらう。

真しんにそれに相違ない。このまま苦もなく死ぬことができれば満足であるけれど、神様がわれわれにそういう幸福を許してくれないかも知れない、と自分もしんから嘆息したのであつた。

当時はただ一場の癡話として夢のごとき記憶に残つたのであるけれど、二十年後の今日それを極めて真面目まじめに思い出したのはいかなる訳か。

考えて見ると果してその夜のごとき感情を繰返した事は無かつた。年一年と苦勞が多く、子供は続々とできてくる。年中あくせくとして歲月の廻るに支配されている外に何らの能の事うじも無い。次々と来る小災害のふせぎ、人を吊とぶらい己おのれを悲しむ消極的いとな営いとなみは年として絶ゆることは無い。水害又水害。そうして遂に今度の大水害にこうして苦闘している。

二人が相擁あいようして死を語つた以後二十年、実に何の意義も無いではないか。苦しむのが人生であるとは、どんな哲学宗教にもいうてはなからう。しかも実際の人生は苦しむるのが常であるとはいかなる訳か。

五十に近い身で、少年少女一いつせき夕の癡談を真面目に回顧している今の境遇で、これをどう考えたらば、ここに幸福の光を発見することができるであらうか。この自分の境遇にはどこにも幸福の光が無いとすれば、一少女の癡談は大哲学であるといわねばならぬ。人間

は苦しむだけ苦しまねば死ぬ事もできないのかと思うのは考えて見るのも厭だ。

手伝いの人々がいつのまにか来て下に働いておった。屋根裏から顔を出して先生と呼ぶのは、水害以来毎日手伝いに来てくれる友人であつた。

(明治四十三年十一月)

青空文庫情報

底本：「野菊の墓」角川文庫、角川書店

1966（昭和41）年3月20日初版発行

1981（昭和56）年6月10日改版26刷発行

※「中《ちゆう》有」とあつた底本のルビは、語句の成り立ちに照らして不適当であり、記号の付け間違いとの疑念も生じさせやすいと考え、「中有《ちゆうう》」とあらためました。

入力：大野晋

校正：松永正敏

2000年10月23日公開

2005年11月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

水害雑録

伊藤左千夫

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>